



くらげ
ピン

For Adult only

くちん

ん





〜ちか井ユイ





聞く必要も
ねーだろ？

その……
今更、さ



キス……
していい？



んじゃ……
スルね？

おう……



んっ

ちゅっ



んっ...

はあ...はあ



ちゅぷい...

んっ



んっ...



んっ...
もっかっ...

はあ
はあ



ちやぶい、

はむ

ちやぶる、

ちやむ

んー



ちやぶい、
ちやぶい、

ちやぶい、

ちやぶ

れろ...はむ



ふわ...あ
のーみん
とロウけきとん.....

はむ...はむ...

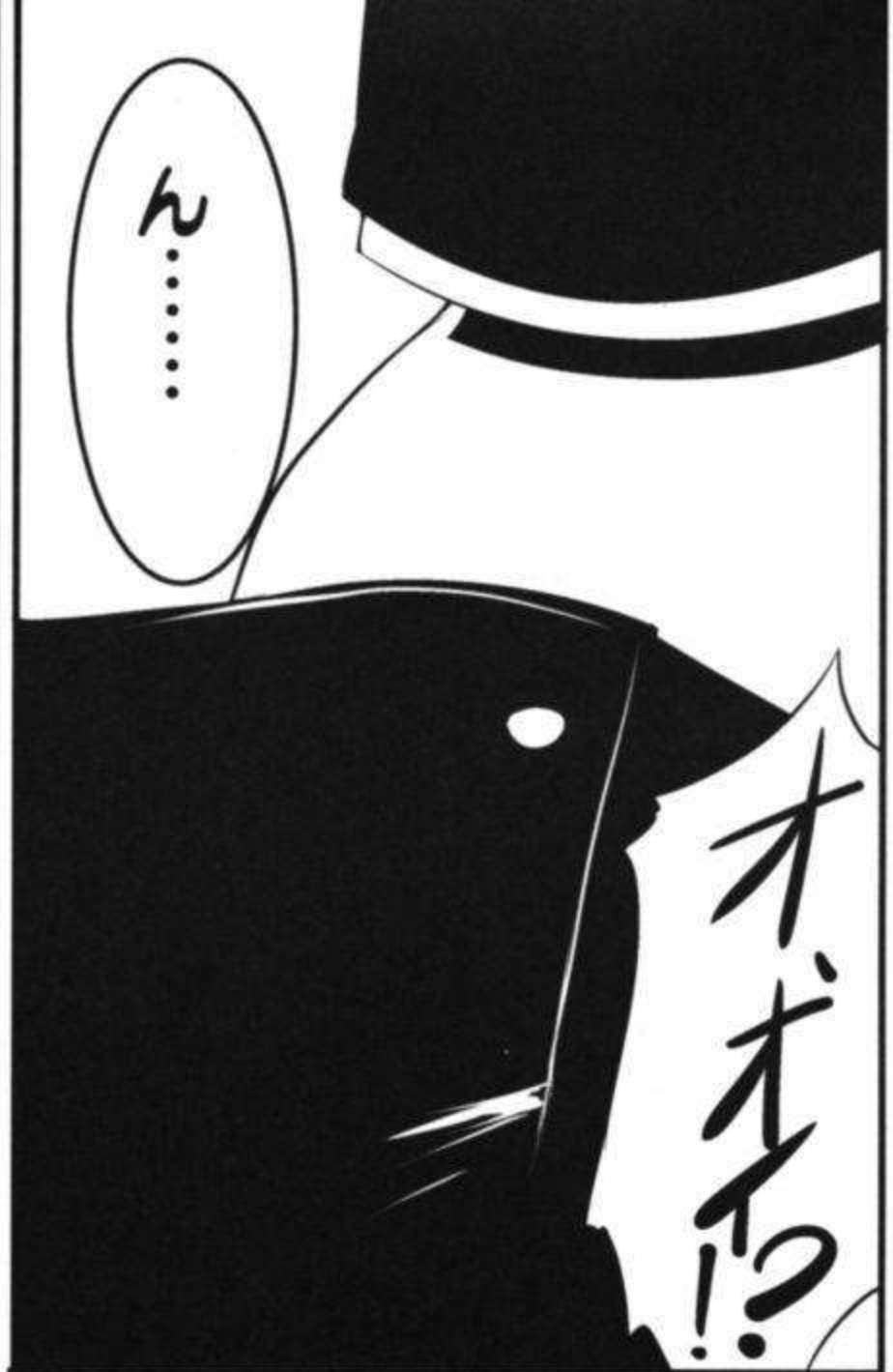
はあ

ちやぶい、





すげ〜大き〜
なUINもよ……
ロム……



ん……

オオオ!



じゃあ……
スルね?

ル
70/L



08



優柔不断



やはりおっぱい





あ……あんまし
見ないでよ!

マジ恥ずいん
ですけど……

いや……
いつも制服で
分からなかったけど
かなり大きいなあ、
……と



そ……そんなエロい
目で見んな!

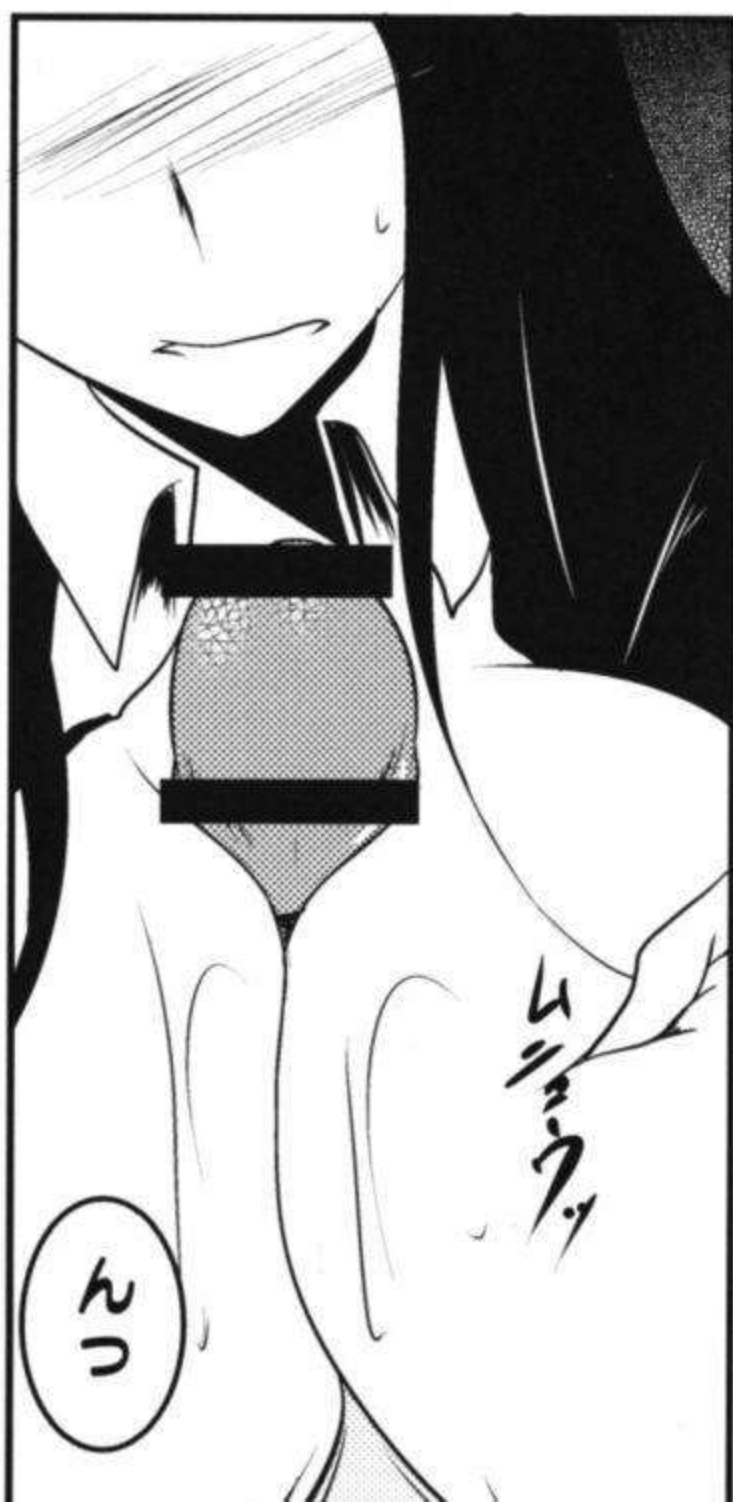


どこのエロゲよ
ホント……



じゃあ早速さ……
挟んでくれよ

俺の……



うわ...
これちよっと
いやらしすぎ
じゃない？

んっ

えっと...
胸でしごいたり...



ん……
はぁ

うおおツ
かなり……気持ちいい……

14



うう……
聞いちゃいねえ……

スリ

スリ



乳首なんかもつかって
みてくれると
嬉しいんだが……

もうっ……
ホント変態なんだから……

4-27





生臭くて……
喉にからみついてくるう



COMIC1☆3の時に
レビュー本の表紙に
使用したイラスト

次ページからは
ゲスト様のSSです。



——変態なのはあたしじゃなくて、あいつだ。

そう言い聞かせていなければ頭がオカシクなりそうだった。

熱い。ストッキング越しに伝わってくる温度と脈動があまりに熱くて火傷しそうで、その火を鎮火するために、まるで小さな焚き火を足蹴にして消すみたいに……踏んだ。踏みつけて、踏みにじって、さらにグリグリと徹底的に足の裏で、指で、責め立てた。

「う……あ、……ああ……ッ」

「へ……ッ！ ……変な声、たてないでよ」

「……うっ、わ、わか……った……」

聞いてなんていられなかった。

鼓膜が蕩けそうだったから。理由はわからない……ホントはわかってるけど、わかっていないフリをしてないと駄目になりそうで、あたしは必死にそれを押し隠した。

騙す相手は、自分自身。

自分に嘘を突き通すコトさえ出来れば、きっと最後まで貫き通すコトも出来るはず。

「……あ、あうっ……ふ、ああっ」

「ちよっと」

グリ、つと。

「ひゃっ!？」

強く、足の裏が硬いモノを圧迫して、あいつの身体が、跳ねた。

人形のようにだった。

温かくて、動いてて、言葉も話すのに。指先一つ、糸の一本で自在に動く人形のように、あたしはどうしてか、妙に頬が弛んでいくのを感じていた。ムズムズ、する。

足の裏もそうだけれど、胸の辺りとか、頬とか二の腕の辺りとか背中とか、

お腹の奥とか……撫で回されているみたいで、あたしはまるで赤ん坊のように身を捻った。

「……はあ」

零れた吐息があいつの顔にかかる。

あいつはまた身悶えした。

苦しい……のか、それともキモチ良いのか。

多分、後者なのだと思う。でなければ、あたしはとんだ道化だ。

「……あ、あはっ♥」

こんな風に、彼氏の股間を足の裏でグリグリと踏んで、指で弄んで、果ては両足の土踏まずで挟み込んで、扱ってる。

それが……キモチ良い。

キモチ良いのは、あたし。なのにあいつも同じように感じていないのだとしたら、変態は完全にあたし……だけってコトになる。

「なによ……キモチ良さそうにしちゃって」

「……うっ、く、ひうう……」

何かを訴えようとしているような目。いつもそうだ。何か言いたいのに呑み込んでしまう。だから、あたしはあいつのコトが……大好き、だけど——あの目は、イヤだった。

あの目を見てみると、凄く嫌な気持ち膨れ上がっていつてしまう。言いたくない事まで口にして、嫌な娘になってしまう。

だからあの目を直視しないために、あたしは弛む頬で一生懸命に笑みを形作った。

きつと、可愛くないだろう。あいつがそう思ってるのかと想像すると、泣きたくなった。

でも泣かない。

泣く代わりに、足に神経を集中させる。

「また、大きくなってない？ ……アンタの、コレ」

「そ、んな……こと……ふぐっ!」

切っ掛けは、些細な事だった。

いつものようにあいつの部屋で二人でゲームして、バカなコト言い合って、

キスして、それから——いきなり、今日は疲れてるとか言い出して。

せつかく気合い入れて新しい下着つけてきた自分が馬鹿みたいで、惨めで、でも凹んだ顔なんて見せたくないから、普段の冗談の延長で、軽く蹴った。最初は背中。

やめろよ、って身を振ったあいつの股間に蹴りが入っちゃったのは、単なる偶然。蹴りなんてものじゃなくて、ただ触れただけ。

あたしの足が、あいつの……アレに。

「……ほおら、ほらっ」

——硬くなったのは、すぐにわかった。

それがどんな意味を持つのかも。……知っていた。他ならぬあいつとの行為で。

「ねえ、キモチ良いんでしょ？　こんなにおっ勃てちゃって……足でされて感じてんの？　……んっ、フ、フフ♥」

恥ずかしくて顔から火が出そうだった。

『なんで足なんかで昂奮してんのよ!?』って、最初はそうなじった。

なのに、必死に顔を逸らしてぶつきらぼうに否定しようとするあいつを見てたら、あのムズムズが襲ってきて……

——気がついたら、足で擦ってた。

「足コキ、って言うんだっけ？　……彼氏が真性の足フェチだったとか、笑えねーわよ」

ホント、笑っちゃうのはあたし……自身。

足に欲情するのが足フェチなら、足で恋人の股間を弄くって昂奮してるあたしは……何なのだろう。

凄く太くて、硬くて、熱くて。

あんなモノが、あいつとSEXしてる時はあたしのナカに入ってるんだと思うと、なんだか足が別の機関になってしまったようで……余計に気分が昂ぶっていくのを感じた。

イヤらしい。

「……あんっ♥」

すごく、エッチで……変態そのものだ。

変態……ああ、そっか。

もう、それでいい気がしてきた。

「んっ、……ふ、はあ♥　まだ硬くなる……あんたの、コレ」

恥ずかしそうに悶えているあいつの、顔。一生懸命に逸らしてるけど、全然ダメ。目が泳いでるのは期待してる証拠だ。いつもそう。

そして、そんなあいつを見てると……あたしも、おかしくなる。

変態に、なっちゃう。

「彼女にさ……足で、お……おちん、ちん、……弄くられて、勃起してる彼氏とか……マジで変態、じゃん。……キモイ、よ」

侮蔑の言葉。

本当は言いたくないのに、ゾクゾクする。

それに、おちんちん、だなんていつもは絶対に口にしないのに。

「う、うう……あっ」

「……キモチ良さそうに喘いじやって……もっとおちんちん、足で踏んで欲しいの？　……それとも、蹴って欲しい？」

ゾクリ、と。

まただ。おへその辺りがムズムズして、イヤらしい気持ちがあんまり膨れ上がっていく。

あいつが素直に答えるとは思ってない。分かり切っている事を訊いて、あたしはまた、足で彼の股間を弄くり回す。

「ねえ……どうなの？　……ねえ？」

呻くあいつの顔。

苦悶の表情、と言えはいんだらうか。

あたしが、そうさせてるんだ。

あたしの足が、あいつのおちんちんをグリグリって踏みにじって、あんな顔させてる。あんな声で啼かせてる。

頭の中はもうとくにグチャグチャだった。変態で、淫乱で、最低の女だと、思う。きつと、今のあたし、酷い顔してる。

なのに……止まんない。

足の動きが激しくなっていく。

「うっ、あ、ああ……や、やめっ！」

「なあに？ やめろっての？ ……ウソ、よね……こんなに、チンポ硬あくさせて、やめるとか……どんな冗談よ？」

「こ、このままだと……お、れ……ぐ、う！」

ズボンの中がどうなってるのか、想像しただけで茹だった脳の神経が焼き切れそうだった。

あいつのおちんちん……いつつもあたしのナカで射精する時、凄く張り詰めて、膨れて、我慢してたものが一気にドバアって弾けていくあの感覚を思い出して……疼く。

おへその辺り……ああ、ちよつと、違う。

多分、子宮。

あたしの子宮が、疼いてるんだ。

「ほらっ、ほらっ！ もおイクんでしょ？ チンポ破裂させて、彼女の足で踏まれてイッちやいなさいよ……ほ、らあ！」

「ひぐううっ!!」

今まで以上に大きく、あいつの全身が緊張したのがわかった。

後はもう、放つだけだ。あたしのナカにそうしてるみたいに、ビュルビュルって、ビュクビュクって。

——それに、あたしも。

「んぐっ、あ、あああッ！」

「んっ♥ ふ、あああああああッ♥」

まったくの同時だったと、思う。

でもそうあれたコトが妙に嬉しくて、あたしは足の裏に物凄く熱いモノを感じながら、震えていた。

下着、ちよつと気持ち悪い。……グシヨグシヨかも。

「……あッ」

力、抜けちゃった。

あいつに覆い被さるようにして、倒れていくあたしの身体こそが人形みたいだった。

……操られてたのは、操ってたのは、誰だったんだろ。

身体と身体が、ぶつかった。

二人とも、凄く肩上下させて、息も絶え絶え。足とおちんちんで……SEXしちゃったみたい。

ホント……なんだろ、コレ。

「……変態じゃん……マジで」

笑えやしない。

なのに、まだお腹の奥で少しだけ、疼いてる。

あの感触。足であいつのおちんちん弄くってた時の、奇妙な熱と、高揚感。どうしようもなく感じてた、あたし。

……ああ、やめよ。

考えてると気が狂いそう。

とにかく、なんかもう、疲れた。

「……はあ」

あいつの胸の鼓動が、すごく近い。

このままのんびり、一眠り……しちやおう。

……起きたら、また……悪態、吐いて……いつもと、同じ……ように……

ふたりで……げーむ……して……

……ん……ふ……あ……ん、むう……

……おやす、み……なさ——

—END—





あとがき

どうも、初めての方ははじめまして。
そうでない方はこんにちは。
寒天と申します。今回はこの本を
手にとって下さりどうもありがとうございます。

今回は放課後プレイ本ということで、
原作をイメージして描いて見たのですが、
なかなか難しいですねえ。

色々と精進していきたいと思います。
もふう

それでは次はコミケ、またよろしくお願いします。

奥付

誌名 : くちさきプレイ
発行者 : 寒天
発行サークル : 寒天示現流
発効日 : 2009/6/7
印刷所 : (有)ねこのしっぽ
サークルサイト : <http://kantenjigenryu.web.fc2.com/>

※18歳未満の購入、購読は遠慮してください。

発行◆寒天示現流



定価◆ 本体 円

放課後プレイ Fan Book



For Adult Only

